

## 岡田吉美先生の御退官によせて

伊庭英夫(生物化学教室)

岡田吉美先生は、本年の3月をもって定年退官されることとなりました。先生は昭和47年7月、理学部生物化学科へ教授として御着任以来、当時の学生にとっては接する機会が極めて少なかった分子生物学の基礎知識や思考法を一から丁寧に教育されることから開始され、この17年に渡り、ウィロイドから高等生物に至る幅広い材料系に対して分子生物学の手法を駆使され、先導的な研究を続けてこられました。

岡田先生は、大阪大学理学部化学科の赤堀四郎先生のもとで蛋白質化学を学ばれ、昭和27年の御卒業後も同研究室で大学院時代を過ごされました。その後、九州大学医学部、ならびに大阪大学医学部で助手を務められた後、米国オレゴン大学に客員準教授として留学をされました(昭和39年~41年)。先生は、ここで、ストライジンガー教授と共同でT4リゾチームの系を用いて、フレームシフト変異の存在を蛋白質化学により、世界ではじめて実証されました。このお仕事は、遺伝子暗号(genetic code)の解明に直接貢献された故に極めて有名ですが、セントラルドグマの生化学的実証に参加なさったこの期を境に、当時黎明期にあった分子生物学に本格的に身を投じられることとなりました。帰国された後は、新設の植物ウイルス研究所において、タバコモザイクウイルス(TMV)の研究に着手されましたが、このウイルスは、先生が今日に至るまで、その再構成の機構から遺伝子構造、複製機構等といった幅広い視点から研究対象とされる重要な材料系となります。

私は、岡田先生が東大に着任された時に、学部3年生で、大学紛争後のまだまだ殺伐としたキャンパスの中におりました。分子生物学という新しく激しい潮流にひかれて先生のもとにおしかけ

た多数の学生の一人であり、それ以来、ずっとお世話になってきました。

先生は、セミナーでの院生や学生の研究発表等ではたいへんに厳しく、安直な説明や、中途半端なDATAではなかなか納得されず、たいへんがんこな化学者としての面を常にもたれていらっしゃいました。その一方で、分子生物学的思考に徹していらして、極めて演繹的でありながら、凡人にとっては思いもかけぬ大胆な発想をされ、驚かされるのがしばしばありました。また先生は、できるだけ研究室に居られる時間をたいせつにされ、我々と討論をして下さったばかりでなく、一旦研究からはなれば、くだけた話もして下さるやさしさと、親しみやすさもおもちでした。「岡田先生は相かわらずおっかないかい」などと後輩に声をかけながら訪ねてくる卒業生が、機会あるごとに先生のまわりに集まり、たのしくさわいだことが思い出されます。

岡田先生は、数年前よりTMVのゲノムRNAを一旦DNAにおきかえたものをin vitro DNA組換えの技法で改変し、それを転写させて得た産物を植物に導入することにより変異体TMVを得るという画期的な方法を開発され、ウイルス遺伝子の機能の新しい解析法とTMVのベクター化への道を切り開かれました。御退官後は、帝京大学理工学部でひきつづき御研究を続けられるとお聞きして居りますが「まだ解析の進んでいない変異体ウイルスを使っておもしろいこと。じめるよ。」とおっしゃられる先生が、新しい夢に向けて御活躍されることをお祈りすると共に、今後とも私共の御指導をお願い申し上げる次第です。